

Newsletter 22

慶應義塾大学教養研究センターニュースレター第22号 / 2013年5月15日発行

Contents

巻頭言	半学半教と学習相談
特集I	【開所10年記念事業】第1回学生論文コンテスト
特集II	【開所10年記念事業】東北支援企画「学びの旅のすゝめ：みちのく見聞録」
特集III	【開所10年記念事業】アカデミック・スキルのあゆみ
特集IV	「学びの連携」プロジェクト
特集V	こんな授業・こんなことをやっています
特集IV	研究サポート「研究の現場から」(井奥洪二／伏見岳志)、選書紹介
活動予定	4月～10月
私の〇〇自慢	



半学半教と学習相談

教養研究センター副所長
篠原俊吾 (法学部)
Shungo Shinohara

学生同士で学び合うシステムは作れないだろうか。学習相談はこうした思いから、2009年、当時当センターの所長であった横山千晶先生の主導で、スタートしました。学習相談員として活躍している学生諸君は、メディアセンターのレファレンスデスクにある相談窓口に座り、学習に関する悩みを抱えた学生に対して、論文の書き方、テーマの探し方、資料の探し方などさまざまなアドバイスをしています。

相談員にスカウトされた学生はみな一様に、自分が瞬時に問題点を発見し、相談者に適確なアドバイスができるかどうか不安を口にします。確かに、何かと効率が求められる昨今、短時間のうちに最短のルートを通って答えにたどり着くことが要求されていると考えてしまうのも無理はありません。しかし、それはまったくの取り越し苦労です。学習相談員には、最短距離で道案内をすることは期待されていません。むしろ、望ましくないことであると言っても良いでしょう。なぜなら相談者にとって本当に必要なのは、当面の問題を手っ取り早く解決してくれるスーパーマンではなく、相談者が自らの力で問題を解決できるよう道標を示してくれる地味な案内役だからです。しかも、この案内役は、目的地まで伴走してくれません。道標を示したら目的地に向かう相談者の後ろ姿を遠くから見守るだけです。

答えを出さないのであれば、相談員に期待されていることは何でしょうか。私は「対話」だと考えています。相談員は、まず何より相談者に寄り添い、話を聞くだけで良いのです。なぜなら、

相談する側は、たとえまとまりはなくても、無意識のうちに話しながら思考整理をしようとするからです。そうすれば、特に相談員が多くを語るまでもなく、往々にして問題の所在が自ずと明確になってきます。相談員は、ただひたすら相談者の思考整理の場に寄り添い、時折道標を示しながら聞き役に徹すれば良いのです。ただし、誤解のないように申し上げておくと、その間、相談員はただ漫然と話を聞いている訳ではありません。対話の中で、間違った道標を示していないか、どの程度まで伴走するか等、その気苦労は計り知れないものがあります。

こうしてみると、実は相談する側、される側どちらが多くのことを学んでいるのか判断することは極めて難しく、学習相談がまさに半学半教そのものであることを示しています。

このような、学習相談員の格闘の日々をまとめた書籍が近く刊行されることになりました。この本は、学生の学生による学生のための一冊であり、まさに、学生の半学半教実践の書としてバイブルになると確信しています。とりわけ、「失敗からどう立ち直るか」を扱った章は、啓蒙的なテキストには決してみられない学生独自の視点が満載で、非常に質の高い内容に仕上がっています。

学びは、年齢や職業にかかわらず、人生のあらゆる場面に存在します。学習相談は、それを実践する小さな試みにすぎませんが、この取り組みを通して、いずれは、社会全体が大きな学びの場であると実感してくれる学生が一人でも増えていくことを願わずにはられません。



開所10周年 記念事業

第1回論文コンテスト

学問に王道あり！

スーツ姿の福澤先生が現代の塾生諸君に挑戦！社会部門・人文部門それぞれの最優秀賞賞金が20万円と、類を見ない高額賞金は話題を呼びました。「変／不変」をテーマにした教養研究センター主催の学生論文コンテストは、全キャンパスの学部1、2年生を対象に、7月10日から8月10日の事前登録後、11月に論文受付、審査委員会による審査を経て、1月24日に結果が発表されました。192名が事前登録し、論文を提出したのは26名でした。

このコンテストの意図は単に賞金で学生諸君の奮起を期待するだけでなく、事前登録をすることで、2回にわたる論文の書き方セミナーに積極的に参加してもらい、日吉や湘南藤沢の学習相談サービスの活用や事前登録者限定のメールマガジンなどを通じて、論文執筆の過程を大学生に不可欠な学問スキルの習得経験として意識してもらうことにありました。すなわち、自分で問いを見出し、調べて、自らの主張を論文の形で発表するプロセスを経験してほしい、それこそが学問の王道であるというセンタースタッフ一同の願いをイベント化したものだと言えます。

柴田事務長（当時）の目標事前登録数に迫る勢いに一同胸が高鳴りましたが、夏休みと三田祭を経て、多数の脱落者が出たことは今後検討を要する課題です。その一方で、みごと書き上げた学生諸君の論文は、甲乙あれども、基本的には論文執筆の約束事を押さえたものになっており、1、2年生でこのレベルに達する塾生諸君の基礎力をあらためて頼もしく感じました。

しかしながら審査委員会は厳しいものとなりました。最優秀賞は8000字で20万円獲得ですから、なんと原稿用紙一枚あたり1万円。委員も未体験の高額「原稿料」です。それに値する将来性、大胆さをどうしても求めた結果、最優秀賞該当しなかったのは、先生方の期待の裏返しでもありました。とはいえ、優秀賞3名の学生諸君の作品はどれも誠実で未来への予感に満ちた論文ばかりです。コンテストの講評および受賞作はセンターのウェブサイトに掲載されています。2013年度のテーマは『「イメージ」を考える』。締切は11月末です。（吉田恭子）

論文コンテストを終えて

記念すべき第一回学生論文コンテストで、優秀賞を受賞させていただき光栄です。たくさんの方々に私の論文を読んでいただけたということを一番嬉しく思っています。この論文の執筆を通して、私は自分の中にある、ずっと向き合えなかったものに向き合うきっかけが作れました。大学生の多くは、授業、サークル、アルバイトを繰り返しながら毎日過ごしているのではないのでしょうか。私もその一員であり、考えたいことはあっても後回しにできてしまっていました。今回、論文の執筆を通して、何度も挫折しそうになりながらも、自分の中で考えたかったことに、真正面からぶつかっていったと思います。「もっとやりたい」というのが論文を提出したときにまず感じたことでした。この論文を出発点にして、ろう（聲）の問題を更に深く考えていきたいです。（法学部2年 青木みな実）



取り敢えず書いて見ること

私が、今回の論文コンテストに出してみようと思ったきっかけは、丁度、勉強していた分野について何か書いてみたいと思っていたことがあります。結果として必ずしも満足できるものが書けたわけではありませんが、優秀賞をとることができたのは幸運でした。今回のコンクールは事前登録の数よりも、かなり少ない論文しか集まらなかったようですが、内容や文章の巧拙によらず、取り敢えず書いてみることに、提出して試みるのが大切なのではないかと思えます。そうした上で懇親会などに参加して教授の方たちからのアドバイスをいただくことが、次へのステップになるのではないのでしょうか。（文学部1年 安部農）

受賞にあたって

教養研究センター主催の論文コンテストにて優秀賞をいただき、うれしく思うと同時に事の重大さに恐れすら感じています。私は、音楽を対象に論文作成に取り組みましたが、一般的に芸術系論文の受け皿は多くありません。加えて、学部1・2年生の論文をプロである教授の先生方に見ていただく機会はとても限られています。そんな中、分野に限定されない当論文コンテストは、私たち学生にとって非常に恵まれた機会だと思います。チャンスが与えられていることに強く感謝しています。20世紀後半は、日本シリアス音楽界に強大なエネルギーがほとばしっていました。この時代の音楽との対話を今後も続けられたらと思います。

（文学部2年 小川将也）

東北支援企画「学びの旅のすゝめ：みちのく見聞録」

教養研究センターは社会・地域連携の一環として日吉キャンパス公開講座を運営してきました。開所10年を記念してテーマを公募し、その結果、津田真弓さんと長沖暁子さんの東北復興支援企画と安田淳さんの中国講座の企画が採択されました。

東日本大震災を機に改めて日本のアイデンティティを問い直すべく、「日本ってなんだろう」と題した公開講座と東北への旅「学びの旅のすゝめ：みちのく見聞録」を連動企画として立案しました。震災で被害をうけた東北の現状と復興の先へ目をむける体験を共有していくことは、今後の日本を考える一日本人として意味ある営為であり、そのような企画を推進していくことは、社会・地域連携を学びの場に還元する教養研究センターの活動として位置づける意義があると考えたためです。公開講座では初回到東北学の提唱者である赤坂憲雄氏に登壇いただきました。中央と辺境の図式に依拠する「創られた東北像」にとどまらない東北理解の一助とすべく、東北の歴史と文化に光をあて、東北の深層に迫り、日本を新しい未来にいだきたいという願いを込めました。企画立案・実施にあたっては、講師として同行して下さった名誉教授の寺澤行忠先生、津田真弓さん、矢上キャンパス文化財調査室の須田英一先生、企画面でご協力くださった長沖暁子さん、伏見岳志さん、文学部石川透先生、とくに考古学民族学研究室安藤広道先生、JTB法人東京の伊藤充彦さん、教養研究センター前事務長柴田浩平さん、山口中さんに大変お世話になりました。改めて御礼申し上げます。（不破有理）

「義経・西行・芭蕉を慕って」

Aコースは、「義経・西行・芭蕉のみちのくを歩く」と題し、20名の参加者と同行の石川透・寺澤行忠両先生と共に、塩竈→松島／平泉→鳴子温泉／最上川→尾花沢→大石田に行く三日間を過ごしました。一日目は塩竈・松島では津波被害のお話を聞き、震災に思いをはせることができました。また、瑞巖寺の学芸員新野一浩氏による松島の現地踏査を敢行。地元研究者ならではの知見をうかがう機会になりました。夜は円通院のライトアップを拝観。二日目は義経・西行・芭蕉の思いがが交錯する奥州藤原氏の世界。三日目は雪と霧の美しい山々を見つつ最上川へ。

夜の講義（一夜目：寺澤先生、二夜目：石川先生）も好評で、参加者には感想もしくは歌・句を毎日書いていただいたのですが、とても熱心な文章と作品が集まり、企画者としてとてもうれしい旅となりました。仲間の熱は冷めず、このメンバーで、江戸巡りの遠足がしたいというご希望を頂きました。（津田真弓）



平泉金色堂



特別史跡大湯環状列石

史跡をもっともっと身近なものに

今回は、三内丸山遺跡と縄文時遊館、大湯環状列石と大湯ストーンサークル館、御所野遺跡と御所野縄文博物館、是川石器時代遺跡と是川縄文館のように、史跡公園とそこに併設された遺跡博物館を巡るツアーでした。そこでは、遺跡の調査・研究と保護に並々ならぬ情熱を持って立ち向かってきた学芸員の皆さんのお話を直接聞く機会も多くありました。ちなみに三内丸山・是川遺跡は、戦後に調査に関わるなど、慶應義塾とゆかりの深い遺跡です。

全国に遺跡は45万箇所以上あると言われますが、遺跡が法により史跡として保存されたり、まして史跡が整備され公園となり、博物館が併設されることは決して当たり前のことではありません。さらに史跡や博物館をうまく活かすには、地域社会が史跡の存在を理解し、行政サイドと関わりを深めていく時間が必要です。おらが街の宝としてそこはかとなくあるけれども、大切に保存され、多くの人が気軽にいつでも立寄れ、集える。そんな地域社会と史跡との関係ができればと改めて考える機会となりました。

（矢上地区文化財調査室助教 須田英一）

アカデミック・スキルのあゆみ

一粒で二度おいしいは・じ・め・ての味♡

映像ミニ講義シリーズ「はじめてのアカデミック・スキルズ」はみなさまの協力のおかげで、YouTube 上の世界デビューを果たしました。

「はじめてのアカスキ」の楽しみ方は二通りあります。まずは、学生に見てもらうこと。1、2年生のみならず、基礎のおさらいに塾生全員に見てもらいたい、と自信を持ってお勧めできる内容です。

そしてもうひとつは、同僚の先生方による入魂のパフォーマンスを純粋に楽しむというものです。ひとつひとつの見所を詳細に語りたいのは山々ですが紙面の都合上、映像講義のラインナップでお許し下さい。(敬称略)

- ・「論文とは何か」佐藤元状（法学部）
- ・「論文作成のプロセス」迫桂（経済学部）
- ・「情報や資料の種類とその利用方法について」浅尾千夏子（メディアセンター）
- ・「文章表現の技法」識名章喜（商学部）
- ・「剽窃について」赤江雄一（文学部）
- ・「講義ノートの取り方」佐藤望（商学部）
- ・「ブレインストーミングの技法」坂倉杏介（G-SEC）
- ・「プレゼンテーション」新井和広（商学部）
- ・「クリティカル・リーディングのやり方」片山杜秀（法学部）
- ・「クリティカル・シンキング」横山千晶（法学部）
- ・「資料と向き合う」津田真弓（経済学部）
- ・「フリーライティングの効用」吉田恭子（文学部）
- ・「テーマの発見と設定」不破有理（経済学部）
- ・「KOSMOS の使い方」杉真梨子（メディアセンター）
- ・「情報検索の基本とデータベース」柴田由紀子（メディアセンター）

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/> (吉田恭子)



写真（上）アカデミック・スキルズ・プレゼンテーション・コンペティションの様子、（右）リユニオンの様子

『アカデミック・スキルズ—大学生のための知的技法入門』第2版の刊行

2002年の開所以来、教養研究センターの実験授業の代名詞ともなった「アカデミック・スキルズ」ですが、本書はその実践の成果として2006年に刊行されました。現在では、全国多数の大学の初級セミナーなどで使われ、導入セミナー教科書の第一スタンダードとしての地位を得ています。

刊行後も、「アカデミック・スキルズ」の授業では、さまざまな教育メソッドの改善を蓄積していきました。第2版は、授業単元に合わせた章構成の変更、説明や具体例をわかりやすくするなど、多くの改善の蓄積を反映しています。また、情報データベースの近年の急速な発展や変化にも対応しました。

教養研究センター発の先進的な教育メソッドはさらに進化を続けています。(佐藤 望)

アカデミック・スキルズ『グループ学習入門—学びあう場づくりの技法』

本書は、2006年に出版された『アカデミック・スキルズ—大学生のための知的技法入門』の姉妹編と位置づけています。『アカデミック・スキルズ』は、大学生が論文を執筆する方法について書いてあり、自習教材としても使用できるのに対し、本書はグループで調査、ディベート、論文の批評などをしながら学ぶ方法や心構えについて書いています。

読んでいただくと分かりますが、学生に向けて書いたのか、教員に向けて書いたのか、はっきりしていません。学生同士、また学生と教員が互いに協力し、学び合いながらクラスを運営していく熱気を味わっていただければと思います。

執筆にあたっては、過去5年間にアカスキを担当した経験を活かしています。(新井和広)

◆アカデミック・スキルズ シリーズの今後のラインナップ『データ収集・分析入門』、『資料検索入門』、『社会調査入門(仮)』、『クリティカル・リーディング入門(仮)』の刊行が予定されています。



アカデミック・スキルズ科目設置10周年の年に

2013年2月6日、アカデミック・スキルズ設置10周年の記念の年のアカデミック・スキルズ・プレゼンテーション・コンペティションが開催されました。例年通りご出席くださった菊池廣之極東証券会長をはじめとした関係各位に加え、今年は長谷山彰慶應義塾常任理事を迎え、大会は14時から始まりました。雪模様の寒い日でしたが、各クラスから選ばれた総勢9名の代表が1年間の成果を発表する熱い時間が過ぎました。会場の聴衆による審査投票の結果、金賞小山高義君（法1）、銀賞木佐貫将司君（法2）、銅賞築野優君（商2）、努力賞金田一敏幸君（経1）となり、不破有理教養研究センター所長より表彰されました。またこれに先立って行われた論文部門の審査の表彰も行われ、小山高義君（法1）が金賞、辛字華君（法2）が銀賞、伊藤弘了君（法2）が銅賞及び努力賞をそれぞれ受賞しました。一方、今年度からは身体知・映像として科目展開する映像クラスも制作した映画を上映し、好評を博していました。大会終了後、懇親会が開かれましたが、今年はかつての受講生にも声をかけ、同窓会を兼ねた懇談の場としました。現役の学生と教員、今は社会人となった卒業生、そしてかつて担当をしていた教員が交流、旧交を温める会となりました。（大出 敦）

つながること～第1回リユニオンを終えて～

まずはこの度アカスキOB・OGリユニオンにお招きいただきましたこと、御礼申し上げます。当日のコンペティションでの発表は、例年どおり多岐にわたるもので、大いに刺激になりました。TAやピア・メンターなどの体制の充実から、アカスキ卒業生との“縦のつながり”が意識されたのも喜ばしいことです。

リユニオンから参加したOB・OGもあり、久しぶりの再会を喜び合いました。途中参加者のために、コンペの結果や研究内容についての簡単な小冊子等をご用意いただけると、現役生たちとより深い知的な交流ができて面白いかもしれません。今後のアカスキならではのリユニオンの展開に期待しています。

1年間の濃密な交流は、強い“横のつながり”をどのクラスにもたらしめます。10年を機にさらなる“縦のつながり”への試みを始められた、教養研究センターの皆様へ感謝するとともに、これからのますますの広がりを楽しみにしております。

(独立行政法人日本芸術文化振興会(国立劇場) 中島雄一)

学びの連携プロジェクト

「学びの連携」プロジェクト 第4回公開セミナー

塾生による塾生のための半学半教の場作り—慶應義塾で展開されるピアサポートシステムの成果と今後—
●日時：3月18日（月）14:00～17:00 ●場所：日吉キャンパス来往舎1F シンポジウムスペース

慶應義塾には、多様な関心と高い能力を持つ学生が集っています。それぞれの長所や経験を持ち寄り仲間同士・先輩後輩間で学び合うことで、授業では得られない細やかで親密な知の連環を作り出すことができ、それによって慶應義塾はより生き生きとした学習と研究の場になるでしょう。日吉・矢上・SFCの3キャンパスでは、学生による学生のための学習・生活相談活動が展開されています。今回の公開セミナーでは、はじめて3キャンパスのピア・メンターとコンサルタントが一堂に会しました。各キャンパスの特性に対応した活動方針と内容、学生たちを引きつける工夫、相談者の悩みを言語化してもらうテクニックなど、ユニークで創意に溢れた取り組みが報告され、コメンテーターとして参加した清家篤塾長・長谷山彰常任理事からも高い評価を受けました。

一方で、それぞれの活動は様々な壁にぶつかってもいます。それを乗り越え、慶應義塾全体の取り組みにステップアップすることで、日本の大学におけるピアサポートシステムの発展に貢献していくことができるでしょう。そのために、3キャンパスが今後独自性を保ちつつ連携していくことが確認されました。(種村和史)

日吉におけるピア・メンターの取り組み

教養研究センターと日吉メディアセンターの共同事業として、「学生の学習環境を整えるプロジェクト」(略称「学び場プロジェクト」)を2008年度に立ち上げました。その中心をなす活動が、日吉図書館1階で実施している「学習相談アワー」です。この活動は、「アカデミック・スキルズ」授業を履修した学部生・大学院生が「ピア・メンター」となり、日吉キャンパス所属の学部1・2年生を対象に行っているもので、論文の書き方やマナー、プレゼン手法についてサポートを行っています。これらの活動に加え、ピア・メンターによる企画展示や講座の実施、書籍刊行の活動も加わり、活躍の幅を広げています。(浅尾千夏子)

矢上キャンパスの塾生による塾生のための相談窓口 S-Circle

理工学メディアセンターでは、2010年度から3年間、慶應義塾創立150年記念未来先導基金の助成を受け、「学生スタッフによる図書館における新しいコミュニケーションの場の創生」プログラムを実施しています。各学科学部4年生以上の22名の学生スタッフで構成されたS-Circle（エスサークル）が、相談業務と企画業務を行っています。相談業務では、平日12時～17時にメディアセンター内の相談スペースで相談を受け付けています。相談内容には制限がなく、学習、学科・研究室選び等幅広く寄せられ、気軽に話をしに来る学生も多くみられます。企画業務では、サイエンス・カフェ等のイベントや理工学部の学生生活の紹介等様々な展示を行い、好評を博しています。(藤本優子)

ライティング&リサーチコンサルタント (WRC)

SFCでは学部1年生から博士課程までの学生たちが学習・研究に励んでいます。メディアセンターのWRCは2011年7月から2012年1月までの試行期間を経て、2012年4月から本格的に活動を始めました。博士課程の大学院生1名、ポストドクター2名がレポート・論文の書き方の相談にのっています。それぞれが社会調査系、政策系、システム系を得意分野としていますが、同時に、相談内容の情報を共有し、違う角度から学部生、大学院生へアドバイスをを行っています。2012年10月、11月には研究会への出張説明会を試み、好評を得ました。昨年度よりも相談者の数は2倍に増えており、リピーターが多くいます。(梁瀬三千代)



写真（上）清家塾長からのコメント
（下）ピア・メンター（日吉）による学習相談の様子の再現

研究サポート「研究の現場から」

一あるポルトガル系ユダヤ人コミュニティの記録

第6回 普通の人々のための再生医療 —骨組織再生材料の創製—

iPS細胞の登場によって、医療の明るい未来が見えてきました。しかし、iPS細胞は困っている人を救うことができる反面、人類が経験したことのない社会問題を生ずる危険性を秘めています。例えば、同性の両親を持つ子供、ヒトの臓器を生産する動物、死者からのクローンなど混乱の種が潜んでいます。このような背景を考えると、特殊な細胞や物質を使わない再生医療技術が必要です。骨については、リン酸カルシウムの化学組成、多孔質構造、結晶面の精密な制御によって、特殊な細胞や物質を一切使用しなくても傷ついた骨を元通りに再生できるまでになりました。独自に開発した人工骨を紹介し、普通の人々のための再生医療について考えるヒントをお話しました。（井奥洪二）

このところ、わたしが調べているのは、ポルトガル出身のユダヤ人たちのことです。近世のポルトガルや隣国のスペインでは、ユダヤ教は禁止されていましたから、隠れユダヤ教徒の多くが大西洋周辺の各地に移住することを選びました。では、移住したあと、出身地での人間関係はどうなるのか。そういう関心を持って、ポルトガル北東部のカシュテロ・ブランコ村出身者について集中的に調べています。彼らのなかにはキリスト教会の裁判にかけられた人もたくさんいますから、各国に現存するその記録を読んで、家族や友人関係、移動の足跡などをできるだけ細かく再構成するのが、その作業です。今回は、そういう記録をもちいて、彼らの移住の理由について紹介しました。（伏見岳志）

注目！ 研究会助成制度

日吉キャンパスには多様な分野の専門家がいるにもかかわらず、なかなか研究の話を学会以外でする機会がない！とお悩みの方々、講義でお疲れのあと、美味しい〇〇でほっとしながらも刺激的なお話を聞きたいという方、この機会にお知り合いも増え、共同研究のきっかけにもなり、といいことずくめ。専門や学部の特長を超えた研究・交流を目指すセンターならではの円卓サロンです。6月は留学帰りの徳永さんと金山先生に、10月は新任の有光さんと山口さんをお迎えします。どうぞお楽しみに。予約は不要、ふらりと立ち寄りください。（不破有理）

この助成制度は教養研究センターの所員が企画する研究会やワークショップを支援することによって、さまざまな研究・教育の企画が日吉で開催される機会を増やすこと、また所員に公開していただき日吉における研究の情報交換の場を広げることを目的とします。助成は開催に伴う経費（謝金、印刷費など1件上限10万円）と日吉キャンパス内の広報の支援を負担します。年2回1月と7月の月末に締め切ります。春学期の企画は1月、秋学期分は7月にご応募下さい。次回の締切は7月31日。詳細は教養研究センター事務室へどうぞ。

◎ 2013 年 6 月 19 日（水）18:15 ～ 来往舎 101 にて
徳永聡子（文学部）「合綴本とイングランドの初期印刷文化」
金山弘昌（文学部）「ガリレオとレオナルド」

◎ 2013 年 10 月 24 日（木）18:15 ～ 来往舎 101 にて
有光道生（法学部）「フグとスイカ:俳句とブルースの『革命的』な出会い」
山口祐子（経済学部）「ヴァイマル共和国時代の本づくりーある文芸ジャーナリストの場合」

教養研究センター選書 13
感情資本主義に生まれて ― 感情と身体の新たな地平を模索する

感情と資本主義、その結託に翻弄されている姿が今の僕らの自画像ではないだろうか。一方で、自分自身の自分だけの感情を求めて右往左往する。他方で、仕事をする中で自分の感情を切り売りしたり、顧客志向の笑顔を作り出したりする。自己実現や自己責任、感情労働やコミュニケーション力といったタームが飛び交い、「要領のいい」生き方が最善であるかのような雰囲気さえ醸成される。しかし、社会全体の不平等の再生産が、そんな雰囲気の中でなされていたなら、僕らの生はとんだ詐欺商法に巻き込まれているとしか言いようがない。この本では、そんな詐欺的な社会の成り立ちについて語り、そんな詐欺社会からどうしたら飛び出す事ができるのかについて述べている。(岡原正幸)

*今年度も選書原稿を公募します。事前申込締切は7月26日（金）、原稿の締切は9月27日（金）です。



【授業】身体知－創造的コミュニケーションと言語力

参加・体験型の授業で、芸術言語を読み解きながら身体ワークショップを組み合わせ、知力と身体感覚の双方を磨き、創造力を刺激します。8月に6日間の集中講義を行い、通信教育課程と通学課程の両方の学生が交流する授業でもあります。今年は総合芸術家としてのビートルズを取り上げて、彼らの精神を学習・継承・発展させます。

(武藤浩史)

【教職員対象】「学びの連携」プロジェクト

義塾の各キャンパスで展開されている、主体的かつ協同的な学びを実現するための先進的な教育メソッドを、実際に体験しながら学ぶ公開セミナーを開いています。さらにそこで学んだ新しいメソッドを、日吉の教育、特に人文科学系の授業に応用し、新たな教育の可能性を開拓しようという「野望」をもって、実験授業も行っています。

(種村和史)

[教職員対象] 教員サポート

大学を廻る環境は複雑さを増しています。教員サポートでは、メディアリテラシー・社会調査法・ITスキルなどそれに対応するための知識やスキルを学んでいきます。また、学生がどのような現状に置かれ、どんな悩みを持って生活しているか、教職員はそれにいかに向き合っていくべきかを考えるセミナーも、学生相談室の協力を得て毎年開催しています。

(種村和史)

現在の「情報」は「パソコンが使える」だけでは不十分です。「情報の教養学」では、教養としての「情報」について考えてゆく機会を持つことを目的とし、春学期は人文系、秋学期は技術系を中心に、身近な話題を題材に、「情報」の様々な分野で活躍されている講師をお迎えし、講演会を開催しています。 (高田真吾)

- 【HAPP】新入生歓迎プール体験会**
4月3日(水)～5日(金) 16:00～19:00
協生館体育施設(プール)
- 【学会・ワークショップ等開催支援制度】ロードマップ～ミャンマーの現在と未来～マ・ティ・ダ女史講演会**
4月19日(金) 16:30～18:00 三田キャンパス北館 大ホール
- 【HAPP】ビショップ山田舞踏講座
—土方巽舞踏大解剖 VII**
4月25日(木) 17:00～20:00(予定)
来往舎イベントテラス、シンポジウムスペース
- 【情報の教養学】
第3回「調査報道を変えたデータジャーナリズムの衝撃」**
6月12日(水) 来往舎シンポジウムスペース
- 【情報の教養学】ワークショップ
第4回「やってみよう! データジャーナリズム実践講座」**
6月15日(土) 来往舎 103/104
- 【HAPP】環境週間 2013**
6月24日(月)～29日(土) 日吉キャンパス
- 【HAPP】「日吉音楽祭 2013」
古楽アカデミー、コレッリ生誕 300 年記念演奏会**
7月7日(日) 14:00～ 協生館藤原洋記念ホール
- ベートーヴェン・マラソンコンサート**
7月12日(金) 18:30～、13(土) 14:00～
協生館藤原洋記念ホール
- 【学会・ワークショップ等開催支援制度】秋学期開催分募集**
申請締切 7月31日(水)
結果発表 8月下旬予定
- 【日吉キャンパス公開講座】
「人の形——身体の変遷と認識、その現在」(仮)**
9月28日(土)～

4月

6月

7月

10月

- 【HAPP】〈ことばの世界〉「武器としてのことば 日本の言語戦略を考える」—鈴木孝夫先生講演会**
4月17日(水) 18:15～20:00 来往舎シンポジウムスペース
- 【情報の教養学】
第1回「むずかしい政治を分かりやすくしたツイッター取材」**
4月24日(水) 16:30～18:00 来往舎 2F 大会議室 →特集 V
- 【情報の教養学】第2回「ウェブで政治を動かす! 実践編」**
5月15日(水) 16:30～18:00 来往舎シンポジウムスペース
- 【HAPP】「親を知らずに成長する主人公たち—アーサー王ロマンス・ファンタジーの本質」
—高宮利行先生講演会**
6月6日(木) 18:15～20:00 来往舎シンポジウムスペース
- 【研究の現場から】
徳永聡子「合綴本とイングランドの初期印刷文化」
金山弘昌「ガリレオとレオナルド」**
6月19日(水) 18:15～ 来往舎 101/102 →特集 VI
- 【情報の教養学】
第5回「社会を可視化し、考え、行動するためのオープンデータ」**
7月2日(火) 来往舎シンポジウムスペース
- 【教養研究センター選書原稿募集】**
事前申込 7月26日(金)
原稿締切 9月27日(金)
- 【研究の現場から】
有光道生「フグとスイカ:俳句とブルースの『革命的』な出会い」
山口祐子「ヴァイマル共和国時代の本づくり—ある文芸ジャーナリストの場合」**
10月24(木) 18:15～ 来往舎 101/102 →特集 VI

*各イベントへのお問い合わせは、toiawase-lib@adst.keio.ac.jpまで

私のP.T.A.自慢

実は密かにコレクションしているものはあるのですが、とても公表できるものではないので、経験を自慢させていただきます。私は小学校のPTA会長をしたことがあります。もう10年前になりますが、今でもこのPTA会長の経験談はとてもいい話題になります。本当にとてもいい経験をしたと思っています。一般的にPTA会長の役割は式典と運動会での挨拶とされている方が大半ではないでしょうか。子供からみれば、知らないおじさんのつまらないお話ですが、当人は結構悩みます。予想外だったことは、他校はもとより、地域の自治会や警察とも関係があることです。お祭り等の地域イベント、通学路の道路規制、防災訓練までPTAが関係しています。これらは全く未知の世界でした。特典もあります。席取りが大変な式典や運動会では特等席でゆっくり観られます。皆さんにもぜひPTA役員をお勧めしたいと思います。(武内孝治)



Newsletter
May, 2013. No.22

慶應義塾大学教養研究センター (Keio Research Center for Liberal Arts)
発行日: 2013年5月15日 代表: 不破有理
〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1 TEL: 045-566-1151 Email: lib-arts@adst.keio.ac.jp
http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/